

世間の常識

金沢市の山側環状より、更に山側の郊外に三橋家が在る。市街地から嫁いできた直美は、高台の此の辺りの景色も人情も好きだ。二階の窓から美しい夕焼け雲が見える時、思わず見とれることがある。

隣家の屋敷には、幹の直径二、三十センチメートルのシブガキの木がある。春には黄緑の鮮やかな若葉が生い茂り、其の内、清楚なクリーム色の花が咲く。

やがて花が散ると、無数に緑色の実が付く。しかし、葉っぱと同化して少しも目立たない。

秋には黄赤色に熟するのだが、其の前に隣の奥さんから声が掛かる。

「内で要るだけカキ取ったけど、良かったら欲しい程掬いだらいいよ。どうせ此の儘にしておいたら熟柿になって、挙げ句の果てはカラスやスズメバチの餌になるだけなんだから」

彼女は、五十三歳の直美より幾つか年上だ。

(カラスやスズメバチか)、直美にとって、どちらも個人的には好感の持てる生物ではない。彼らも餌が欲しいだろうが、故意に

譲ってやる気になれない。それで、隣の奥さんのお言葉に甘えて掬がせて貰うことにする。

「有り難うございます。じゃ、後程取らせて頂きます」

小麦色の健康美が備わった直美は、翌日、カット&キャッチャイプの高枝鋏を持ち出し、スーパーマーケットの、やや大きめのレジ袋に二袋取る。彼女は、中学時代、どんな切っ掛けだったか定かでないが、空手道場に通っていたことがある。形や組手の基本はマスターしていた。この程度の作業など苦にはならない。皮を剥ぎ、紐で結んで、日当たりの良い窓際に吊るす。十日程で、自然の甘さの干しがキが出来上がる。三つ上の夫、義夫の大好物だ。直美も好んで頬張る。歳上の隣の奥さんが、わざわざ掬いだのを頂戴するのなら恐縮するが、自分で取らせて貰えるのは気が軽い。

晩秋には、カキの木の落葉が風に乗って三橋家の敷地内に舞い落ちることがある。其れを片付けるのは直美だ。美味しい干しがキのことを思えば、少しも心の負担にならない。

長野のブドウ農家の嫁になった直美の姉から、ダンボール箱で

大野町 大勝 勝

ブドウが届くことがある。産地直送だから、新鮮で、すこぶる旨い。

「長野のお姉ちゃんからブドウ貰ったんで、此れ、御裾分けです」

と言つて隣の奥さんに差し上げる。すると「どうも有り難う」ではなく、「まあ、気の毒な」と言つて大層喜ばれる。直美は感謝の気持ちの「気の毒な」は余り使わない。考えてみれば不思議な表現だが、感情は良く伝わる。

其のようなことが何年も続いている。

三橋は、車で二十分程の、業界中堅の機械製作会社で品質保証課に席を置いている。中肉中背の、がっしりした体格で、精悍な面構えだ。彼の考案した検査装置が功を奏し、社長表彰を受けたことがある。殊更、出世欲が深い訳でもなさそうだが、其れでも数年後、課長に昇格した。部長と部下の板挟みに苦勞することもあつた。

ある夜、直美が三橋に言った。

「お父さん、今朝、トイレ流してなかつたわよ」

「え？　そうか、悪い悪い」

三橋は朝食を終え、身支度を始める頃から（今日はあれてして此れして：）と仕事モードに入るようだ。

直美は、夫の仕事一筋も良いが、会社人間になることなく、そのそる興味を見つけ、定年後は生き甲斐になる楽しみに没頭出来るような生活をして欲しいと望んでいる。其れも、アウトドア、インドア、シングル、グループの各パターンで、浅くても広い複数の道楽を持つように勧めてみようと思つている。彼女は、厳しい業務に取り組んでいる筈の夫のご褒美として、人生の黄昏時には、地域社会と関わり乍ら気楽な過ごし方が出来るようになって欲しいと考えている。

二十七歳になる長女の清子は、浅野美容室に勤めている。彼女は直美に似て、まあまあ美貌に恵まれている。本人は、もつと高くかっこいい鼻に産んで欲しかったと思つているらしい。が、直美は此れで十分愛嬌のある、別嬪さんだと意識している。美容整形の技術は頗る進歩しているようだが、清子は其処までやる気は毛頭ないと見える。

彼女は、直美の姉の孫娘が来ると、良く遊んで呉れ、子供が好まらしい。

清子は、美容室で、もうベテランの域に達している筈だ。が、美容関係の雑誌を購読し、絶えず腕を磨いているようだ。将来は自分の店を持ちたいと考えている節がある。

彼女の四つ下の長男は、大阪の大学で勉学に勤しんでいる。就職先も内定し、社会人に成るのも目前だ。

直美は今、三人で暮らしている。彼女は週一回、アートフラワー（布花）教室に通い、気が置けない仲間と楽しんでいる。直美は、新聞のテレビ番組、天気予報、小説、読者からの投稿、週刊誌の広告以外の記事にも眼を通すことがある。最近の少子化問題にも漠然とした不安を感じている。母親だけでなく、父親の育児休暇や経済的な子育て支援など、対策が講じられているのを頼もしく思う。育休パパが仕事を外されたという事態があつた。其の会社が問題視され、新聞に大きく取り上げられる程、世論も変わった。それでも此処十年程で、出生数が年百万人台から八十万台に減少したと報じられている。インフラを維持しなければならぬなど、国の存亡に関わる問題だと気になる。

直美は三橋と二人で二人の子供を持ったから、ノルマを果たしているのかな、と単純に思っている。願わくは、四人以上の孫が授かつて欲しいものだと考えている。大手M新聞でヘメリットは

ないのか少子高齢化」という川柳を見たことがある。(ないだろうな)と思う。

大きな雪害もなく、三月になった。或る日の夕飯の後、清子が言った。

「今度の土曜日に、雄三さんが来るんだけど、会って貰える？」

直美も三橋も、清子が製薬会社の研究室に勤めている三十歳の井沢雄三と付き合っているのを知っている。交際を始めた頃、彼は顔を見せに来た。真面目でインテリ風な好青年の印象があった。清子も彼の両親に会ってきた、と聞いている。今度、彼が訪ねてくる目的は予測出来た。直美は(其の時が来たか)という思いだった。其れは(遂に)という寂しい気持ちと(漸く)という安堵の心が半々だった。

土曜日の午前、約束の時間に井沢が着いた。彼は改めて自己紹介をした後、正座して言った。

「清子さんと結婚させてください」

三橋は頷いてから、
「少し我が儘な所が有るかもしれんが、宜しく頼むよ」と言うこと、

「清子を幸せにしてやってください」

直美が言つて頭を下げた。

「はい、清子さんを大事にし、温かい家庭を作ります。仕事を持ち帰ることがあつても、お互いに干渉しないことにします」

頼もしい言葉に、直美は涙が出そうになった。婚姻は、規定の年齢に達すれば、本人同士で決められるというものの、多くのカップルと同じように、清子達は親の承諾を得、祝福されて、ゴールインするのがベストと考えたのだろう。井沢は其の日の大仕事

が終わったかのように、ほっと一息吐いて膝を崩した。

清子が言った。

「結婚しますけど、仕事を大切にし、子供は儲けない積もりです」

直美は(えっ?)となった。結婚すれば子供が出来、子育てするのは当たり前だと思つている直美は意表を突かれた。

「其れでは井沢さんに：」

(申し訳ないのでないか)と言ひ掛けたが、井沢は、

「私も同じ考えです。他にも意気投合することが多くて、一生を共にしたいと思うようになりました」

三橋が言った。

「二人の大切な人生なんだから、端から兎や角言うことは何もないよ」

(夫は、可愛い外孫の顔が見られなくても平気なのだろうか)と直美は恨めしくなった。

子育てを、生活の中で余り重視しないように考える人が増えてきているのだろうか。子供を持つことが、人生の計画にないだけの話かもしれない。子育ては経済的にも、時間的にも確かに負担の大きな仕事だとは思ふ。清子達の考えは時代の流れの一つ、と認識しなければならぬのかもしれない。直美は、次第に娘達の気持ちを尊重するようになっていった。

清子は一箇月後に結納を交わし、其の四箇月後に結婚式を挙げた。直美は三橋と二人暮らしになった。

直美が婦人会の会合で公民館へ行った時、町外れに住むてる子が言った。

「娘さん結婚されたそうね。おめでとう」

彼女とは特別に親しくしている訳ではないが、気さくで懇ろな方だという感じを持つている。

「ええ、御陰様で。有り難うございます」

「此れからは、お孫さんの誕生が楽しみでしょう」

直美は、

「まあ、そうですね」

と曖昧に笑った。(いえ、娘は子供を持つ積もりはありません) などと言う必要は無いと思った。娘が嫁にいけば、孫が出来る、其れは世間の常識なのだろう。直美は少し肩身の狭い思いになった。

半年余り立った頃、婦人会の常会の時、会員では唯一、一人暮らしの佐知子と一緒にあった。彼女は何所か憂いをふくんだ目つきで、奥床しく、物静かな感じだ。花が好きで、ガーデンングが趣味らしい。下心のある男は、引き付けられるかもしれない不思議な雰囲気がある。佐知子が言った。

「娘さん、そろそろお子さんが出来るんじゃないの？」

彼女は、てる子と家が近く仲良くしている。

「いえ、未だなんです」

「あ、そう。もし出来ない体質だったら心配ですね」

直美は、返事のしようがなく、黙って、ふーっと溜め息を吐いた。(余計なお世話だ)と心の中で呟いた。不妊症でもない限り、そろそろ身籠るだろうというのは、世間の常識かもしれない。此方には此方の事情があるのだが、弁解する気にはなれない。娘夫婦は自分達の人生計画があるのだが、身体に欠陥でもあるかのような捉え方は癪に障った。

数週間後、直美はスーパーマーケットで、てる子に会った。

「今日は。娘さんお元気？」

「ええ、御陰様で」

「お孫さん、未だなの」

「はい、未だです。仕事に頑張っているようですよ」

「そうなの。早く産まないとねえ」

もう出産可能な期限が切れるとでも言いたいのだろうか。少子化問題があるから、三、四人産んで欲しいと期待しているのかもしれない。勝手にやきもきするのは自由だが、直美は快く思わなかった。

十日余り立った頃、直美は薬局のレジで支払を終え、帰り掛けた時、顔見知りの婦人会員と出会った。(また、清子の話が出るのじゃないかな?)と、嫌な予感がした。直美は無意識で斜めに構えた。

「今日は。直美さん、もうお孫さん出来たの？」

「いえ、未だです」

「そうなの。ちゃんと生むように母親が説得しなきゃ」

直美には其の積もりはないが、

「そつうものかな？」

と差し障りがない返事をした。婦人会員は、

「そう、常識よ」

と、然も有益なアドバイスをしてやったように、満足そうな表情をした。確か其の夫人は、直美より二、三歳上だが、まるで先輩かのように上から目線だった。

(常識か、私には常識が欠けているということなの? でも、清子に『結婚したんだから、人並みに子供を産み、育てなさい。其れが普通でしょ。世の中には欲しくても出来ない方がいるのよ。社会に対して申し訳ないと思わないの』などと言う気にはな

れない。『じゃあ産もうかな』と言うような娘ではないことも分かつている。私は非常識なのだろうか。直美は少し落ち込んだ。

彼女は、もう此の人達とは関わりたくない、と思うこともあった。しかし、夫の仕事の関係で、新天地への引越しもない限り、其れは儘ならぬことも分かつていた。

三人以上の子供と連れ立っている夫婦を見掛けると、ほっとし、有り難く思い、頭が下がりがり、声援を送りたくなる。夕飯の後、三橋が言った。

「最近、体重が減ったということはないかい？」

「そうねえ、前より一キログラム程少なくなっただけ、歳のせいでしょうね。デブになるより良いと思っているわ。痩せようと努力している人もいるけど」

と直美が言った。

其の数日後、

「此の頃、あんまり食欲が無いんじゃないか？」

と三橋が心配したので、直美は言った。

「いえ、大丈夫よ。昼間、うっかりおやつを食べ過ぎちゃって食事を減らすことはあるけど」

言われてみると、以前より食べる量は少し減ったように思う。

夫が気に掛けてはいけなさと考え、適当にごまかした。

二、三日後、三橋が言った。

「近頃、夜、熟睡出来ているか？」

「たまに夜中に眼が覚めることがあるわ。其の後、なかなか寝付かれなくて困るの。羊を数えても百何十匹迄いくと止めてしまおうわ」

「あれは日本語じゃ駄目なんだ。シープ、シープと心の中で唱えるといいらしいよ。スリープに似ているが眠りを誘う呼吸に

合っているそうだ」

「まあ、そうなの。今度やってみるわ」

「睡眠はチヨウチヨウのようなもの、と聞いたこともあるよ」

「チヨウチヨウ？」

直美は意味が分からなかった。

「遮一無二追えば逃げるし、静かにそつとしていければ近付いてくる、ということだ」

数日立った頃、直美が買い物を終えて、駐車場に出た時、同年代と見える婦人から声を掛けられた。見覚えがあるようだが名前が思い出せなかった。

「あら、直美さん、今日は。もうお孫さん出来たんですか？」

直美はかっとなった。

「煩い、構っていらん！」

と叫ぶや否や、握り拳で思い切り相手の下腹部に強烈な一撃を食らわした。婦人は「うっ！」と悲鳴を上げて其の場に崩れ、微動だにしなかった。空手の組手試合なら、相手に直接当てることは禁止されている。が、直美は痛烈に打ちのめしてしまったのだ。肋骨を折ってしまったかもしれない。彼女は暫し呆然と立ち竦んでいたが、はっと我に返った。

「誰か救急車呼んで！」

と喚こうとしたが声にならなかった。直美も蹲って「うー」と呻いた。大変なことをしてしまった。此れで傷害罪か殺人罪の前科者になるのだろう。夫や子供達、それに井沢さんや親族の顔に泥を塗りまくることになる。此の先どうやって生きていけばいいのだろうか。皆と別れ、テレビでしか見たことのない刑務所に入ることになるのか。直美は呻き続けた。

「お母さん、どうかしたのか?」

直美は三橋に揺り起こされた。

「何だか怖い夢を見たようなの。起こしちゃって御免なさい。おやすみ」

直美は、緑の草原で草を食べている羊の群れを想像し乍ら(シーブ、シーブ……)と頭の中で繰り返し始めた。

三、四日後の朝、三橋が出勤の支度をしていた時、直美から突然罵声が飛んだ。

「お父さんっ、トイレ流してないよっ、ポーっとしてないでしょかりしてっ、ったく」

「ん? そうか、悪かった」

三橋は素直に謝った。不機嫌な顔で支度を終わると、

「じゃ、行ってきます」

と言ったが、何時もの直美の返事は無かった。

金曜日の夕飯後、三橋は言った。

「明日、心療内科へ行つてこようか」

「しんりようないか?」

直美は聞いたことがあるような気がするが其れはいつ頃誕生したもので、どのような診療科なのか知らない。

「其れって、精神病院?」

「いや、精神の病気じゃなくて、ストレスや精神的な原因による体調不良を治療する病院なんだ。五十年以上に確立された医学の一分科らしいよ」

「ふーん、そうなの」

直美は分かったような、分からないような気がした。

「で、誰が診て貰うの?」

「お母さんだよ」

「私、別に何処もどうもないけど」

「どうもないか?どうかは医者が診断するよ」

翌日、直美は渋沢と三橋の後に続いた。其処は金大病院の勤務医が数年前に開業したものだそうだ。

車で十五分程走ると、住宅地の通りに面した医院に着いた。普通車四台程入る駐車場があつて、小さな看板が出ていた。直美は其の通りを何度か通つたことがあつたが、其処が医院とは気付いてなかつた。

彼女は、広い駐車場があつて、入口にガラスの大きな自動ドアがあつて、ガラス窓が沢山ある明るい医院をイメージしていた。が、其処は正反対だった。院長のこだわりの造りなのだろうか。

三橋が木製の引き戸を開け、中に入ったのに直美が付いていった。彼女は中に入る時、ちらりと後を振り返つた。何となく人に見られたくないという感情が走つた。

三橋が受付をし、二人は誰も居ない待合室の椅子に掛けた。数少ない小さな窓にブラインドが掛かり、隙間から陽は差していたが、表は見えない角度になつていた。

数分後、看護師に「三橋さんどうぞ」と呼ばれ、診察室に案内された。パソコンが置かれた広い机の前に、三橋より五つ程上に見える、少し痩せ形で色白の医師が掛けていた。隣の部屋の戸が開け広げられ、中で看護師がデスクワークをしているのが見えた。医療器械らしいものは見当たらなかった。別の部屋にでも有るのだろうか?

「どうされましたか?」

問診が始まると、自覚症状の無さそうな直美に代わつて三橋が

説明した。妻の体重減少、食欲不振、睡眠不良、元元明るく穏やかな性格だが最近少し寒き込んだり苛立つことがあるように感じる。其れに、此れ迄耳にしなかつた暴言を吐くことがあつた、など。

医師は二人の顔を見乍ら、ブラインドタッチでパソコンを操作していた。

「奥さん、血圧と心拍数と体温を測らせてください」

隣の部屋から看護師が来て手伝つた。

「奥さん、何かストレスの溜るような悩みがありますか？」

と言いつら、測定結果をパソコンに入力したようだ。

直美は少し考えてから言つた、

「悩みという程のものではないと思いますが、うんざりするところが多いです」

三橋は一瞬、ぎくつとしたようだ。(もしかして、俺が関係あるのかな?)と思つたのかもしれない。

直美は娘の結婚、婿さんと同じ考えで仕事を優先し子供を産まない方針、其れに就いては、主人共二人の気持を尊重している。しかし周囲の人から「早く産まない」となどよく言われていることを話した。

医師は、直美の顔を見乍らパソコンを操作していた。やがて彼は柔和な顔付きで言つた。

「あなた方は、立派に娘さんを育てられましたね。パートナーも素晴らしい方で良かったです。私達にとつて、一番重要なことは、自分の人生を生きることでしょう。誰かや、何かに決められるのではなく、自分の意志と経験と努力で自分の人生を織り成していくこと、其れが最も大切ですよ。自由に好き勝手に生きれば良い、というのではなく、やりたいことに精励し、社会の役に立つ生き方が大事だということです。娘さんに関して、あなた方の親

としての仕事は此れで一段落です」

丁寧で説得力のある、頼もしい話し振りだった。医師は更に続けた。

「問題は、世間の常識で批判する周囲の人でしょうね。うんざりする気持ちは良く分かります。社会の規則なら明確ですが、常識なんてものは個人によつて差異があります。同人でも、時に因り、相手に因り、思いが変わることさえあるものです。何も深刻に考える必要はありませんよ。娘さんの、〈産まない権利〉の選択肢など思い付かない人達を哀れむことにしましょう」

医師は、他にも多くの事例を挙げ、易しい言葉を使つて解説した。直美と三橋は、頷き乍ら聞き入つていた。

「来週の土曜日にまたお越しください」

「先生、何かお薬が出るのですか？」

診察が終われば、必要な薬が処方されるものと思つている直美が確かめた。医師が言つた。

「薬は不要です」

帰り際には、待合室で患者が一人掛けていた。直美の知らない人だった。

(私達の子育ては此れで良かったのだ)直美は、気持ちの重苦しさを感じていた訳ではなかつたが、何だか肩が軽くなつたように思えた。

三日後、直美はホームセンターの駐車場である子に出会つた。直美は別段、不快な予覚がしなかつた。てる子が言つた。

「お孫さん未だ出来ないそうね。子供を産まないと一人前に見られないかも」

其れは世間の常識なのだろう、と直美は気に留めなかつた。彼女はにっこり笑つて言つた。

女はにっこり笑つて言つた。

「もう立派な大人になったと、誇りに思っています。周りに流されないで、自分達の生きる道を進んでいますから」

直美は土曜日に心療内科で二回目の診察を受けた。医師は直美と三橋の顔を見乍ら、短い問診をしてから言った。

「もう大丈夫ですよ。軽い鬱病に成り掛けただけでしたから。早く来られて良かったです。正直で真面目で几帳面な方ほど罹り易い傾向があるといわれています。良い性格なのですが、度を過ぎないように気を付けたらいいと思います。又何かあったら何時でも来てください」

直美は、何時の間にか体重も食欲も元に戻った。夜も良く眠れるようになった。

或る日の夕飯後、ソファで夕刊を見ていた三橋に直美が言った。

「お父さん、今朝、トイレ流すの忘れてたわよ」

「えっ？ そうだったか、済まん済まん」

と三橋は言つて、又新聞に眼を戻した。

四日後、直美はスーパーマーケットの駐車場で、嬉しそうなる子に会った。

「直美さん、今日は。此のヘアスタイル、どう？」

と、得意顔で言った。

「とても良く似合っていて素敵よ」

「そうですね。姪っ子に勧められて、昨日、浅野美容室へいつてきたの。娘さん、清子さんでしたよね、立派な美容師さんに成られて……」

と感慨深げに言った。

「オーナーも、『研究熱心で、若手の指導も適切にやって呉れ、私の片腕になって貰っています』と頼りにしていたわよ。お店、

流行る筈だわ。あれだけ張り切ってるあげくに、此の先、もし、産休で腕が落ちるようなことがあったら勿体ないと思つたわ」

其のように言つて貰つて、直美は悪い気がせず、口元が綻びた。
(出産の計画は無いので、どうぞ御心配なく)と彼女に言つてあげたい思ひだった。

「良い話聞けて嬉しいわ。此れからも、どうぞ御ひいきにお願いしますね」

と、つい勝手に営業活動をしてしまった。こういう噂が、どんな広まって欲しいと、虫のいいことを考えた。夜、此の話を夫にしよう、今度清子に会つた時、彼女にも話そうと思つた。第三者からの褒め言葉というものは特に嬉しく、励みになる筈だ。
てる子の話は未だ終わつてなかつた。

「手際の良い仕事ぶりで、明るく、にこやかで、センスが良くて、初々しい新婚さん其の物でしたわ。幸せな家庭生活の感じも滲み出てたわよ。佐知子さんのような人生になる心配は決してないと思つたの」

「えっ？ 佐知子さんのような人生？」

直美は思わず聞き返した。

「彼女は老舗の和菓子屋の御曹司に見初められて結婚したけど、不妊症の疑いや、旦那の不倫とかで、三十代後半に離婚したつていうじゃない？ 詳しいことは知らんけど」

不倫の相手のことや、其の後の顛末など、本当はもっと詳しいことを知っているように感じられた。

「まあ、そうだったの」

「あら、知らなかつた？ 彼女には悪いこと喋っちゃつたかしら」

てる子はそう言い乍ら、特に悪びれている様子は無かつた。

直美は、周りに意地の悪い人達がいなと思う。各各の常識で、何気無く御喋りを楽しんでるのだろう。話す前に、こう言ったら相手はどう思うだろうか、と頭を働かせてから口を開く人と、そうでない人など、性格は様なのだろう。神経質になって、めくじらを立てることはない。直美は凶太さの点で少し成長したような気がした。

今後、孫のことを聞かれたら、(いえ、未だです。娘は仕事に精を出しています。浅野美容室も利用してくださいね)と微笑み乍ら返そうと思う。

城下町金沢を象徴する名園、兼六園や卯辰山一帯を整備した自然豊かな卯辰山公園は誠に奇麗だ。が、直美は所所の民家の屋敷内に植わったカキの木、サクラ、モチの木、ハナミズキ、ユズの木などの眺めも好きだ。神社や寺院の境内の、古木の緑も、街路の若木の緑も美しい。此の町の自然にも人間味にも心を引かれる。

元首相が銃撃されるといふ、身の毛もよだつ暴挙があつたり、自然災害は多く、悪性ウイルスの感染防止対策をしなければならず、少子化問題も気に掛かるものの、戦争の無い平和な此の国が何時迄も続いて欲しいと直美は願っている。百%正しい、とは限らない世間の常識に惑わされることなど、取るに足りないことだと思っている。

